

IPPS日本支部 第22回群馬大会へのお誘い

IPPS日本支部 第22回群馬大会 実行委員長 登坂 初夫

会員の皆様は益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、今年の大会は群馬県で開催することになりました。

ところで、皆様は群馬県を知っていますか？

富岡製糸場が世界遺産に登録されて初めて群馬県が何処にあるか知った人もいます。

そんな群馬県内にはIPPSを知っている人がほとんどいません。今回は群馬の花の生産者に協力を頂き、この大会を引き受け、何とか成功させるよう努力して行きたいと思えます。皆様にご満足頂くにはどのような企画が良いのか、手探りでしたが、次のような予定を立てました。

9月19日は前橋市の『元気21』において総会、特別講演、研究発表、その後、会場を「さくらホテル」に移して懇親会を行います。2日目はカネコ種苗㈱の研究農場の見学、先日、西武ドームで行われたバラ展で優秀な成績を収めた切りバラ

の生産団地を視察させていただく予定です。また、時間があればジョイフル本田の新田店の視察も考えています。移動の時間が

多くかかるために視察会場が少なくなっています。詳しい日程は、後日郵送いたしますので、「9月19、20日は是非、群馬へ出張」と予定してください。

群馬に行ったら良かったと思われるような大会になるように私たちも頑張りますので皆さんの参加を宜しくお願いいたします。皆様にお会いできることを楽しみにしています。



バラ団地全景

目次

IPPS日本支部 第22回群馬大会へのお誘い (登坂 初夫)	1
IPPS New Zealand Region Conferenceに参加して (水谷 朱美)	2
New Zealandでの研修 (磯野 貴子)	4
ハクサン・グループと㈱フローリテック・ジャパンのご紹介 (高臣 映生)	5
スリランカの紅茶生産 (藤森 忠雄)	7
IPPS-J 第九期理事・監事・役員・理事代理名簿 (2015.1.1~2016.12.31)	8

IPPS New Zealand Region Conference に参加して

株式会社ベルディ 水谷 朱美

4月9日から12日に開催されたニュージーランド支部大会に参加してきました。開催地は、南島の北端にあり、昨年の交換生のジョーと一昨年のアリスがいる町ネルソンです。海には13kmにわたる砂嘴があり、天橋立がある京都府宮津市と姉妹都市となっています。

大会へ行く前にオークランドから北島のハミルトン市内にあるピーター氏のご自宅にお邪魔して4.2ヘクタールもある広い敷地に建つお宅と自作の池がある庭、工房や木材加工場、ブルドーザーほどもある大きな乗用芝刈り機などを見せていただきました。街の中心地からほんの少し離れただけでゆったりとした穏やかな時間が流れる素敵な場所でした。

ネルソン到着後は、ひと仕事。NZ支部理事会に一部参加して日本支部の近況や交換生プログラムへの感謝を述べ、継続の希望を伝えました(といっても説明は全て大森さん)。日本支部HPの英語対応のことや会員勧誘のための取り組みについても話がありました。私達の退席後も今後の活動等について熱心に議論が続けられていました。

さて、支部大会です。150名もの参加者でにぎわっていました。9日はウエルカムパーティー、



10日-11日は午前発表、午後見学会(10日午後見学会後ヨットクラブで総会)、夜はパーティーでオークションありダンスありで大盛り上がりでした。11日のパーティーでは、サプライズで私達二人が呼ばれ、NZ支部のグッズを記念品として贈呈していただきました。

研究発表では、商品紹介のような企業発表やネイティブプラントについての研究発表、天敵昆虫や菌を利用した栽培についての発表等様々でした。12日はお昼までの日程となっており、研究発表後、交換生ジョーの報告、支部からの研究奨学金を貰った若い会員2名の発表、磯野さんの自己紹介、支部内功労者等の表彰、来年4月にクライストチャーチで開催される国際大会の案内、今大会の実行委員達を紹介して労った後、大会終了宣言がなされてお開きとなりました。最後まで多くの会員が参加しており、活動が活発である



ピーター氏工房
道具がよく整理されています



理事会の様子
緑Tシャツの背中はリチャード



発表会場の様子
椅子は中央に向けて緩やかに湾曲して並べられています



IPPSグッズ販売

Tシャツ、ポロシャツ、帽子等



見学会の様子

皆とても熱心



見学会にて

マルチ巻き取り機の紹介

様子がよくわかりました。

歴代交換生の4人が参加しており、皆元気に仕事を頑張っているようでした。その誰もが日本支部の皆さんへの感謝の言葉と良い経験が出来たことへのお礼を改めて言ってくれましたし、機会があれば是非また訪問したいともっていました。日本からの磯野さんは、初海外ということでしたが大会中のプレゼンもしっかりと行い、どっぷりとKIWIイングリッシュの世界につかりながら日本との違いを楽しんでいるようでした。

個人的には、ピーター氏の案内で視察できた

オークランド市内の培養会社や、大会中に何人もの人達と知り合えたことも収穫でした。また、日本人の家族（兄弟や子供の配偶者）がいると言って話しかけてくれる気さくな会員も多くいたことでとても楽しく充実した時間を過ごせました。美味しい食べ物やワイン、豊かな水と緑も満喫した旅となりました。



懇親会場の席取り

靴が片方載せてある!?!日本では絶対に見られない光景と思ひパジャ。



総会の様子

真ん中に座っているのが磯野さん



懇親会

中央手前背中はリチャードとジョー



ネルソンの海が見える丘から

砂嘴が海の中を区切る線のように見えています

New Zealandでの研修

東京農業大学 造園科学科 磯野 貴子



IPPS NZ支部の年会参加のお話をいただいたのは、東京農業大学の造園科学科に3年次編入学が決まり、新しく世界にも目を向け学びたいと考えていた矢先の出来事でした。

今回の私は4月8日から24日までの17日間ニュージーランドに滞在し、ネルソン、西海岸のレイクブルーナ、クライストチャーチ、ワイマティ、ダニーデン、オークランドと6つの街を訪ねました。

まずネルソンでは、4月9日から12日までIPPSニュージーランド支部の年会が行われました。NZの皆様は私を暖かく迎え入れて下さり、どんな些細なことも私ができるまで説明してくださいました。見学先ではNZのナーセリーは日本の農場よりも遥かに大きいことや、一種類の植物でも多くの園芸品種を揃えていることに驚きました。



4月11日のディナーパーティーにて

ネルソンでの大会期間中、とても良くしてくださったお姉様方と一枚。日本人女性としては大きめの私も、NZでは小さく見えました。



4月12日のプレゼンテーション

慣れない英語で自己紹介をした時の写真。発表後、多くの方に“よかったよ、お疲れ様”など温かいお言葉をかけて頂きました。

次にレイクブルーナにあるジュリエットのナーセリー“Lake Brunner native plants”に滞在しました。Lake Brunner native plantsはNZの在来植物を専門に扱っており約30種の植物がありました。印象に濃いのはHebeで、約1000種類がNZに自生しており、街路植栽や庭木としてよく利用されており、このナーセリーでも26種類ものHebeがありました。

クライストチャーチでは“Southern Woods Nursery”で働くスージーの家で2日間お世話になりました。Southern Woods Nurseryでは挿し木前の処理を手伝わせて頂き、また、販売所では生垣に向いている植物を実際に刈り込んだ姿で展示しており、ポット苗だけでなく成長した植物の姿を見ることができました。

次に私はトラックに乗りクライストチャーチからワイマティへ、そしてさらにダニーデンへと向かいました。ワイマティではハイマン夫妻にお世話になり、一晩という短い間でしたがとても親切にしてくださり、たくさんのお話をしました。

ダニーデンではブラウン一家が営む“BLUE SKIN NURSERIES”で週末を過ごしました。土曜日は、町の中心で開かれるマーケット、中国庭園や植物園を案内して頂いたおかげで、休日に人々が町や緑地でどのように過ごすのか知ることができました。夜にはなんと、ラグビー観戦にも連れて行って下さいました。日曜日は一日、ナーセリーでの仕事を体験させて頂きました。NZではスタンダード型の植木が特に人気で、玄関の両脇や庭のアクセントに植栽されています。今回はスタンダード型の樹木を作るために、側→

ハクサン・グループと (株)フローリテック・ジャパンのご紹介

代表 高臣 映生



私は1981年6月に現在の(株)ハクサンを立ち上げ、それまであまりなかった種苗の生産者向け卸会社として輸入苗、国内生産苗の販売をスタートさせました。そのころはまだ輸入苗の規制が非常に厳しく、需要もあまりなかった時代です。毎回の植物検疫では約半数が植物防疫所できめ細かく検査され、根付き苗は根を徹底的にほぐされ、それらの苗は枯死してしまいました。

しかし今日では海外との距離も非常に近くなり、情報も他に遅れることなく、今欧米で起こった情報も瞬時に手元に届く時代です。種苗の需要もそれと共に急激に伸びてきています。今までの新品種に対する考え方も、新しければ儲かる、という時代から、新品種による今まで以上に良い特性、即ち耐病性、生育期間、品種間の特性の共通化（色が違ってても生育習性が同一）等々に注目さ

れるようになってきた。またそれらの導入がコストダウンにもつながることが新品種の新しい価値ともなってきた。

1981年にハクサン設立以来、1986年にデンマーク人パートナーと生産会社J&Hジャパン、1988年4月にハクサンインターナショナル(株)、1992年6月にセイロン・フォリエッジLtd.を立ち上げてきた。そして2000年9月にトヨタ自動車との合併会社(株)トヨタフローリテックを製品鉢生産の目的として青森に設立した。2014年には(株)ハクサンがトヨタの株式をすべて買い取り、新しく(株)フローリテック・ジャパンとして2015年度から再稼働した。

このフローリテック・ジャパンのほとんどの生産物はセイロン・フォリエッジLtd.で増殖された→

→ 枝の剪定、大きなポットへの植え替え、支柱の設置を行いました。初めての作業だったため、まっすぐと美しく成長することを願っています。

その後私は、ハイマン夫妻、エリオット一家にお世話になりながら、旅の最終地点オークランドへ向かいました。オークランドではピーターに案内してもらいながら、NZの都市の緑地や景観を見て回りました。住宅地や道路わきには広い土地を活かした緑化がされ立派な樹木や芝緑地がある反面、ビルの集中する中心街や新開発された住宅地ではコンクリートで周囲を固められた細く小さな緑地があるのみで、都市緑化の問題点は共通する部分も多いのだと感じました。

私はこの旅で、大学で学んでいる緑地の計画設計、維持監理についてだけでなく、様々な視点か

ら植物について学ぶことができました。また、素晴らしい人々に多く出会うことができました。今回の経験と縁を大切に、より広い視野で造園という分野をとらえ学びを深めていきたいです。

交換留学を支援してくださったIPPSの皆様、本当にありがとうございました。



オークランド one tree hillにて

ピーターに連れて行って頂いた高台からの一枚。360度オークランドの街を見下ろすことが出来る絶景スポットでした。



→ 苗 (半数以上が種苗法での登録品種) を輸入し、仕上げられている。

(株)フローリテック・ジャパンでの生産は特に小鉢生産を中心に行っている。6cmの製品生産は日本の生産状況では手間がかかる割に価格が取れないということで、その生産量は極端に少ない。しかし、消費者にとっては安価なかわいい植物として興味をそそられている。弊社ではこの製品のことを総じて「根の付いた切り花」として紹介している。鉢サイズは6cm、9cm、10.5cmそして12cm。その他に、デザインを施した独自の寄せ植えもデザイナーと企画部の元製品出荷もしている。

興味のある方は次のサイトを見てください。

<http://www.floritechjapan.com> (まだトヨタフローリテックジャパンとなっています。)

約2ヘクタールのガラス温室はすべて自動化され、エップアンドフローシステムのベンチはコンピューター制御によるロボット運搬により各温室等のレーンに搬送され、そこで生育に従ってトレーン或は縦横操作可能なクレーンにより、鉢広げやピンチ、或は出荷作業等へ搬送される。このように機械化できる場所はヨーロッパのように機械化している。しかしここでも日本の場合は他国との競争もなく、労力もまだ北欧と比べれば安い。そのため、生産規模も小さくて済み、コスト削減のための機械化コンピューター化がそれほど

切迫して要求されることもないのである。結果生産者にとっては6cm小鉢よりも大きな規格を好まれる。

デンマークやオランダでは2haであろうが10haであろうが、単品の生産品目が主流で、それにより、より集約的な経営、専門的な研究が発展する素地がある。やはり、そのマーケットが3億3千万人の市場に向けられた戦略があるからであろう。

一方、我が国の市場では人口は1億2千万人と大きな市場であるが、生産総額は4,800億円、ヨーロッパEU諸国の生産総額、1兆8,750億円と比較される。金額だけでなく総生産量が比較できればより大きな差が出てくると考えられる。

その様な背景であるが、生産システムは欧州型であるが、そう生産数量は400万ポットが可能

であるが、その品種数は多種多様である。その半数がミニバラ (ローズ・フォエバー、日本版ホームページ：<http://rosesforever.jp/>) であるが、その他はシーズンによりさまざまであるが、



プリンセスJFS受賞

ポインセチア、シクラメン、ガーベラ、カプシカム、カンパニュラ、カラコエ、その他様々な観葉植物が生産され、それぞれの環境を適応するものに変えなければならない。

フローリテックの立地条件は生産主要地と比べるとそれほど条件は良いといえない。そのためにも、デンマークが小鉢化に集約していると同時に、フローリテックも周年生産可能な地として省

コスト化に努め、運送方法を改善し (CCJコンテナ輸送を検討中)、遠隔地からでも安価で魅力のある商品生産を消費者に届けていきたい。



CCJコンテナ

ヨーロッパ鉢花鉢物用トローリー、CCコンテナを日本のトラックサイズに合わせ、園芸業界の独特な必要性を満たすようデザインされています。

スリランカの紅茶生産

(株)赤塚植物園 藤森 忠雄

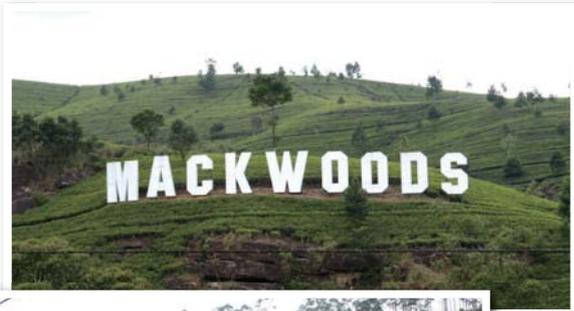


今年2月下旬、三重県国際農業者交流協会の研修旅行でスリランカへ出掛けました。

世界遺産や農場の見学、寺院での参拝もしましたが、ここでは紅茶の生産状況について少し報告いたします。スリランカに農場を所有する高臣映生会員の案内で旅行をしました。

スリランカは日本の北海道の80%ほどの面積の国です。気候は熱帯です。

中部のヌワラ・エリアを中心にした、丘陵地帯の標高800m~1300mの地帯が『セイロン紅茶』の生産の中心だとのこと。この辺では一面の茶畑が広がっていて、茶摘みの女性の姿があちこちで見られました。



リプトン社の見学を希望していましたが、それは実現できず、他の2社の生産状況を見学しました。何れの会社も、生産・加工・販売をしている会社でした。観光客が立ち寄って、生産状況や加工の過程を見学出来る様になっており、またその過程が写真で展示されていました。レストランでは食事が、喫茶コーナーでは無料で紅茶の試飲ができ、また即売コーナーには沢山の自社製品が並べられていました。スリランカは紅茶の国というだけあって、紅茶生産が大きな観光資源となっていました。コーヒーより紅茶の方が好きな私は期待どおり美味しい紅茶を楽しむことが出来ました。

丘陵には全面に茶が植栽されており、それも急傾斜面もあり、茶摘みが大変そうな所もありました。排水の良いことがお茶の生産には大切な条件とのこと、その意味では好都合な立地でしょうか。所々には高木が植えられていました。人間が休憩するのか？

日本の茶畑に比べると、まったく雑な茶畑でした。生産管理をしている様子はなく、施肥をした跡も見かけませんでした。

お茶の香りは生産地の高度に比例し、味は肥料の施肥量に反比例すると、友人の茶生産者が話していました。その意味では最適な立地条件かもしれません。また、ここで生産されているお茶の種類はアッサム種とのことでした。

見学中に、茶摘みの女性達を通りかかりましたので、話を聞いてみました。

その会社は約300haの生産で、約500名の女性が茶摘みをしているとか。摘み賃は葉1kgで40円、1日に800~1,000円の日当だとのこと。→

→「1日に20～25kgの葉を収穫する」とのことでした。彼女達の楽天的な表情や衣装にスリランカを感じました。

この地方には何十社かの紅茶の会社があり、200～700haの面積で生産・加工しているそうです。それらが『セイロン紅茶』として世界中に販売されているとのこと。リプトン社が紅茶の業界のリーダーとして君臨し、紅茶の品質などの規格を守らせているそうです。勿論経営はイギリス人だそうです。



IPPS-J 第十期理事・監事・役員・理事代理名簿 (2015.1.1～2016.12.31)

	役職	氏名	会社・所属
1	会長	大橋 広明	愛媛大学
2	副会長	水谷 朱美	(株)ベルディ
3	副会長	石井 克明	国際環境研究協会
4	事務・会計理事	南出 幹生	南出(株)
5	編集理事	富田 正徳	バイエルクロップサイエンス(株)
6	国際理事	鈴木 隆博	(株)浜松花き
7	理事	藤森 忠雄	(株)赤塚植物園
8	理事	速水 正弘	静岡県立農林大学校
9	理事	大西 隆	(有)セントラルローズ
10	理事	内田 恵介	グリーンクラフト
11	監事	鉄村 琢哉	宮崎大学

	役職	氏名	会社・所属
12	本部 国際理事	Peter F.Waugh	Carann
13	国際交流推進委員	大森 直樹	(株)山陽農園
14	年史編纂委員	遠藤 弘志	
15	理事代理	青山 兼人	兼弥産業(株)
16	理事代理	文室 政彦	近畿大学
17	理事代理	乗越 亮	東京農業大学
18	理事代理	大内 盛勢	(有)スコレー
19	理事代理	佐藤 伸吾	三菱樹脂アグリドーム(株)
20	理事代理	島崎 一彦	高知大学
21	理事代理	登坂 初夫	(株)登坂園芸

編集後記

今回のニュースレターにはニュージーランドへ交換研修に行かれた磯野貴子さんの体験記を掲載できました。私の感想は『若い方には可能性がいっぱいあり羨ましいな』です。磯野さんがどんな気持ちで17日間を過ごしたのかその心境についての詳しい記述はありませんが、兎に角、ご自分が勉強している分野についての多くの貴重な知見や素晴らしい人々との出会いを通じて、有益な経験が出来たことと思います。また、磯野さんは考え方の視野が広がったことでしょうし、勉学に対

する意欲を高めたように感じました。これからの彼女の活躍に期待をしたいと思います。

さて、私自身、学生時代に2年間アメリカで農業研修を体験しましたが、この研修の経験は大変に貴重で、今日の私自身の基礎になっていると考えています。その意味でも、当会議が実施しているこの交換研修の意義は極めて大きいと思います。更に、有能な若い方を探して、ニュージーランドへの交換研修に参加していただけるようにしたいものです。

ニュースレター担当：藤森忠雄